

---

# 魔法先生ネギま! ~ The GunSmith ~

モーディス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～The Gunsmith～

### 【Nコード】

N9638M

### 【作者名】

モーデイス

### 【あらすじ】

その世界には、魔法使いとも気の使い手とも分類できない技能を持った者がいる。その中に、トラブルバスターを生業としていた男がいた。

己の能力を『ガンズミス』と呼ぶ男は、ある日、関東魔法協会の長から手紙を受け、学園へと足を運ぶ。そこで彼が受けた依頼とは…？

## 序章『ガンスミス』

ネギ・スプリングフィールド。

天才的な頭脳を持ち、魔法使いとしての才能も高い。

魔法学校の卒業試験として日本の中学校の教師を一定期間勤めあげる。

また、人間的な成長を期待してか、2003年現在、中学校教師を続けている。

が、やはり10歳に満たない少年である。

つまり、人生の経験が10年以下であるということだ。

いくら才能があるからといって、その事実には違いはない。

だからこそ、補佐が必要だった。

それなりの常識と良識があり、性格的にも彼の成長に役立つ。

尚且つ、緊急時には十分な戦力となり、平時も彼の補佐を務められる。

そういった人物が必要であった。

だが、調達が難しかった。

関東魔法協会は、その規模に反して人員が少ない。

十分な実力を持った人間は、全体の5%にも満たないのが現状だ。

魔法使いが全体の20%、その類の異能力を持った人間が全体の50%。

45%は、純粹な戦力として数えるには忍びない。  
個人単位で戦えるのは、ほんの一握りだ。

他の管理区から無理矢理連れて来るわけにはいかない。  
どこもかしこも、人員という点では手一杯なのだ。  
だからこそ、彼に白羽の矢が立った。

## プロローグ『ガンスミス』

学園長室に用事のある人物というのは、とりわけ少ない。  
そもそも、学園長に呼ばれることなど本来は滅多にないのだ。  
教職員を相手にした話でも、学園長自らが職員室に顔を出すのが常である。

その学園長室で、皮張りのソファに座って対峙する2人。  
1人は件の学園長なのだが、だとするともう1人は何者か。

えらくガタイのイイ男だった。  
身の丈は190cm程度だろうか。  
その身体の太さと重さは、常人のそれとは比べられない。  
座ったイスが限界ギリギリまで、深く深く沈んでいる。  
それだけで、男の体が規格外だということが見て取れた。

鉄骨で作られた骨に、生ゴムできた筋肉を叩きつけて作ったような  
まるで、人間ではないかのような、そんな肉体の持ち主だった。  
その体と頭部をつなぐ首もまた太く、頭よりも一回り大きな首であ  
る。

さて、では身体に乗っている顔はどうかというところ。

似合わないメガネなどかけているせいかな、覇気に欠けていて。

挙句、髪はボサボサ、眉毛は手入れされてないと、容姿以前の問題  
だ。

もう少し気を遣うべきなのだが、男はそんなことを気にする様子も  
ない。

「なんだよ、ガキのお守やってるガキのお守って」

愚痴をこぼしながら、書類の束を机の上に軽く叩きつける。

オマケに舌打ちまでつけるあたり、本当に不愉快であったのだろう。  
己より何回りも小さいような男を睨みつけ、聞えよがしに溜め息を  
ついた。

「確かに危険手当は魅力的だけどさあ。今の仕事、やり辛くなるん  
だよな」

「トラブルバスターなんぞ、最近は流行らんじゃろ？」

トラブルバスター。

様々な問題を解決することを生業とする者のことを指す言葉だ。その種類は様々で、ボディガードなどの派手な仕事もあれば、浮気調査なども多い。

探偵業との大きな違いは、仕事の比率と出来ることの幅くらいである。

主だった探偵業者がやる限度は、ストーカーの牽制と通報。

だが、その手の専門のトラブルバスターとなると、ストーカーの排除まで行っ者がいる。

法的か、物理的か、違法か否か。

その程度の違いはあるが、金額に見合った仕事をするのだ。

そして、件の男もトラブルバスターなのだが。

「趣味で仕事選んでるからイイんだよ」

「趣味で人を殺したりしておると言うことか」

「そりゃ結果だ。俺を経験を積みたいただけなんだって」

人間相手だろうが、そうで無かろうがな。

そう付け加えると、ソファーからゆっくり腰を上げる。

ギシリ、とソファーが鳴くほどに、男の体重は重いようだ。

見た目からして100kgを超えているのは間違いないが、それ以上は計り知れない。

そのまま学園長に背を向け、学園長室から去ろうとする。

もとより何も持ってきていないのか、カバンの1つさえ持っていない

い。

もう用はないと言わんばかりに、足早に扉を目指すのだが。

「君が戦いたがつとった、ナギ・スプリングフィールドのせがれじやぞ？」

その言葉に、男の足がピタリ止まる。

もう1歩を踏み出そうとしていたようで、かなり不自然な体勢で止まっていた。

それでも、男は体勢を直そうとはしない。

その場に留まりながらも、口だけは動かす。

曲がってしまった己の意思を伝え、1歩を踏み出すために。

「困るなあ、近衛右門さん」

男は1歩を踏み出した。

ただし、今までいた道に帰るのではなく、新たな道へと踏み出した。その道は、間違いなく横に逸れている。

だが、それが近道であるなら、男は躊躇わない。

例えばイバラの道であろうと、例えば地雷原であろうと。

おとぎ話のような不可思議な呪いが待ちうけようが、鉄と火薬の洗礼があるうが。

男は、立ち止まるわけにはいかないのだ。

「そういうことはさ、先に言ってくれないと」

たいしてよくもない面の口元を、下手な笑いのように歪め。  
先ほどまで座っていた、まだ沈んでいるソファに再び腰を落とす。

「さあ、ビジネスの話と行きましょうか」



## 序章『ガンスミス』（後書き）

メインが『真剣で私に〜』の二次創作ですので、遅筆になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9638m/>

---

魔法先生ネギま! ~ The GunSmith ~

2010年10月9日04時07分発行